慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会思想史上のフランシス・ベーコン
Sub Title	Francis Bacon in the history of social thought
Author	植木, 憲二
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1951
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.44, No.7 (1951. 7) ,p.415(19)- 433(37)
JaLC DOI	10.14991/001.19510701-0019
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19510701-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

をすべての經濟政策の焦點とし、從つて財政政策も亦この一點に集中しなければならぬとするならば、以上の如き所論に到達するであろう。そしてかかる結論は明白に財政の解釋に新しい方向を規定したといつてよいのである。

追記　本稿は「ケインズ理論と財政政策」（金融經濟三號、一九五〇年五月所載）に續く稿であり、ケインズ理論の展開に沿つて財政理論および政策の發展を追求してゆく研究計畫の一篇をなすものである。（一九五一・六・三稿）

社會思想史上のフランシス・ベーコン

植木憲二

一

フランシス・ベーコンが近代科學の鼻祖として仰がれ、イデオロギー論の先驅とみなされ、近世哲學の創始者として稱揚せられていることは今更喋々の要はない。ここに殊更ベーコンを省察する所以は、イギリスとフランスとの間に存する社會思想史的交流を探る必要からである。というのは、ルネッサンスの洗禮を受けて發生する近代思想の二大潮流が、大陸にあつてはデカルト・ライプニッツ、スピノーザの合理主義（rationalisme）であり、イギリスに於てはベーコン・ホッブス、ロック、ヒュームの經驗論（empiricism）である以上、フランスに於ける Cartésianisme に對するイギリスの Baconism を理解することは研究の順序として當然のことであろう。然し紙面の都合上本稿では專ら問題をベーコンのみに限り、考察の對象も殆んど Novum Organum と New Atlantis の二著作に止めたいと思う。

然しベーコンの研究は上掲の二書のみでは無論充分とはいえない。彼が最初、文筆家として世に名を現わした Essays; Counsels Civil and Moral.（註1）は彼の全著作の中で最も一般的であり、最も知られているものであり、「ベーコンのエッセイは、觸れられている總ての問題について誠に正しい、獨創的な、そして素晴らしい觀察に滿ちているの

で、最も私を喜ばせるものを中から選ぶということはできない。思想の範圍、見解の多樣性と外延性、全く堅實な感覺、そして賞讃さるべき聰明さに對して、如何なる人の著作が此等の驚くべき見解と太刀打できようか」[註2]と讃辭が送られているのを見れば此の書の重要性が親われるであろう。然も尙彼にあつては極く控え目な位置を占めていたとはいえ、經濟學に關する彼の見解を覗くためには、此の書を措いて他に同樣の價値あるものが無い以上、少くとも此れに言及することは必要であろう。又此の他に注目すべきものとして The Advancement of Learning がある。此れに依つて彼が哲學者としての名聲を確立したばかりでなく、「ノーヴム・オルガヌム」に於て集大成を見る歸納法が既に此處で發芽している事を思えば、「ノーヴム・オルガヌム」の考察對象の一つが歸納法に在る以上、此の著作に觸れぬ事も同じく許されないであろう。然し敢て此の二書を除いた理由は、本稿が徒らに杜撰な紹介に終つて了うことを惧れたからに外ならない。尤も「ノーヴム・オルガヌム」と「ニュー・アトランチス」を特に採上げたのは、社會思想史的見地よりするベーコンの研究に積極的な意義を認めたからである。というのは、前者こそ大陸合理主義哲學の始祖であるデカルトの Discours de la méthode「方法敍說」と對置さるべきものであり、中世スコラ哲學が用いたアリストテレスに發する演繹論理學＝三段論法に代える歸納法を以つて當て、遂に經驗哲學及び功利主義思想の創始者たらしめ、スコラ哲學に終止符を打つてルネッサンスを契機として現われる近代哲學の礎石を置いたからである。又後者は彼の廣汎な自然科學の知識に基いて一つの理想社會繪圖を繰り展げている點、それがトーマス・モアの「ユートピア」に續いて現われたという點、此の二點はイギリス十七世紀の社會的背景との關連に於て解明さるべき社會思想史上幾多の重要な問題を提起していると考えられたからである。

（註1）一五九七年初版、十のエッセイが含まれるに過ず、一六一二年、三八、一六二五年には五八に增加されて最終版が出た。

此の研究には Edwin A. Abott; Francis Bacon, 1885. Richard whately; Bacon's Essays, 1873. James Spedding; Lord Bacon's Works, 1857. 等が良い。

（註2）English Classic Series; Essays. p. 5

（註3）W. Roscher: Zur Geschichte der englischen Volkswirtschaftslehre 中の第四章 Francis Bacon von Verulam は殆んど此のエッセイズの中に含まれている經濟學的言論に基いて觀察されている。

（註4）一六〇五年に出版されベーコンが念願した「科學の再興」の第一部に當る。「ノーヴム・オルガヌム」はそれに續く第二部を構成している。後に De Augmentis Scientiarum という表題でラテン譯が出される。

二

ベーコンの名が直ちにわれわれに思出させる有名なマクシムは、「知識は力なり」という言である。「學問の進步」と同樣にアフオリズム形式で書かれた「ノーヴム・オルガヌム」[註1]は次の如く言う。「知識と人間の力は同義語であるというのは原因を知らざるは結果を無効ならしめるからである」[註2]と。人間を規定して「自然の從僕」と言い「自然の解釋者」[註3]と呼んだことと並んで、右の言葉程ベーコンの哲學思想を端的に表現しているものはない。というよりは此れが彼の全哲學體系を貫き、或はノーヴム・オルガヌムとなり、或はニュー・アトランチスとなつて現れていると見るべきであろう。J・E・クレイトン教授が「ベーコンが彼の新らしい方法を述べた本をノートヴム・オルガヌムと呼んだのは、その論理學的諸作品が長い間總稱 Organon と云われて來たアリストテレスに對する反抗を强調することにあつた」[註4]と述べているが、それは實にベーコンにとつては、知識が人間の現實的生活に具體的な効果を齎らすことに於てその力が認められたのであり、アリストテレスの論理學に端を發し、それに惡しき神學化が加えられて成立した中

世スコラ哲學が、――實はアリストテレスを絶對的權威にまで昂揚することによつてその眞意を歪曲しているのであるが――三段論法を驅使する徒らな論爭の武器でしかなく、更に悪いことにはそのドグマチズムが彼にとつて最も重大である實生活に資する科學的知識の進歩を阻むものであるという事實こそ、ベーコンがその書にノーヴム・オルガヌムなる表題を選んだ所以なのである。然らばアリストテレス及びスコラ學者に向つて如何なる對抗を示したかと言えば、先ず抽象に對して具體を、次に觀念的論議に對して經驗的檢證を、最後に形式的演繹法に對して實驗的歸納法を以つて當てたのである。從つてベーコンは言う。「然し乍ら、われわれの論理學は普通論理學がそうであるように精神の微々たる鉤（hooks）で單なる抽象觀念をひつかけて摑むというのではなく、寧ろ自然を實際に洞察し、物體の性質と作用及びその實體を規定する法則を發見する爲に（それ故われわれの此の科學は精神同樣事物の性質から湧出るものであるが）悟性を導びき敎えるものであつてみれば、論理學がわれわれの方法の事例として自然の觀察と經驗とによつて絶えず點綴され、說明されているとしても怪しむに當らない。」（註5）即ち彼は自らの論理學を具體的な自然の認識素材に裏付けされたものとして組立てようとしたのである。更に彼の科學に對する思考の中に、一切の諸科學の母體たるものは自然科學であるという確固たる信念があつたことは、彼の如何なる著作を通じても看取し得るが、此の考えこそ研究の起點に自然的素材を置き、その認識に對して感覺を當て、思考に際して歸納的推理を用い、抽象的觀念を排して具體的効用を求めさせたものである。冒頭に書かれた「自然の從僕であり、解釋者としての人間は、事物に就てであれ、思考に關してであれ、自然の秩序について彼の觀察が許す限りそれ丈を行い且理解するのであり、それ以上を知りもしなければ知ることもできない」（註6）という言が敎える如く、彼が自然に對して謙虛であると共に感覺と經驗の認識成立に於ける絶對性が主張されているのである。確かに彼が自然の前に立つ時「自然の精妙さは、感官或は悟性のそれを遙かに凌駕している。だから人間の尤もらしい瞑想、思索及び理論は狂氣の類に過ぎぬ」（註7）と激しい警句を發しているが、その反面續けて「自然の精妙さの傍に立ち、觀察すべき人が單に居ないということ丈だ」（註8）として自然認識の可能性を含ませているのである。そして此の認識の可能性は外ならぬ方法論の問題に係わつて來るところのものであり、それが inductive methode 歸納法なのである。これをベーコンは如何に考えていたか。「眞理を探求し發見する爲に僅か二つの方法が存し、又存し得る。一つは感覺と特殊物から最も一般的な原理に突如飛躍し、原則であり又原則が明白な眞理であると假定されたものとしての此の原理から中間原理を推論し、發見するのである。此は現今行われている方法である。他は感覺と特殊物から絶えず徐々に、遂には最も一般的な原理に到達する迄上向することによつてその原理を構成する。此れこそ正しいが、まだ試みられない方法である」（註9）と。此處に現われている實驗と觀察とに結ばれた歸納法は、具體的には知識の獲得法であり、擴大法であつたことを忘れてはならぬ。此の點が方法論をして單に方法論プロパーとしての形而上學的レルムを脫して、後に現われるプラグマチズムを用意せしむる所以なのである。從つて「近世哲學が知識（乃至認識）の問題と共に始まつたとすれば、近世哲學の發端は大陸の隱遁家デカルトよりも寧ろイギリスの偉大な俗物ベーコンにあつたと云わねばならぬ」（註10）という言は首肯するに値するであろう。然もベーコンにあつては、此の方法論が現實的な要請に基いて生れたことを意識していたと見るべき節がある。即ち彼は此を自らの創意によりも更に强く時代の力に歸せしめているからである。彼の置かれていた環境は如何なるものであつたか。「彼は先ず第一に、知識に絶望して一切の科學は不可能であると主張する一派と、その反對にギリシャ人から手渡されたところの典據と學問に立脚して科學は旣に知り盡されていると斷言し、その結果としてその科學の整頓と加工に全力を捧げる一派の人々からの反對とを豫期せざるを得なかつた。更に科學の領域そのもののうちに

も二種の反對者があつた。その第一は思辯的或は論理的哲學者で、彼等は自然を先入觀によつて構成し、その探求に當つては三段論法と抽象的推理を用いた。その第二は單なる暗中模索に過ぎないところの盲滅法の實驗を行う人々から成立つていて、彼等は時たま善い成果や發見につき當ると、それに心を奪われて普遍的眞理の方へ堅實に徐々に進んで行くことを忘れてしまつた」（註11）と言われている。即ち當時一般哲學思想上には、不可知論及び懷疑論と他方ドグマチズム及び古代復古主義があり、自然科學上には觀念的論理主義と他方無法則的實驗主義があつたのである。斯かる環境の中にあつてベーコンが序文で述べている如く、先ず感覺的知覺から出發して自然認識を正確に得、その素材に働き掛ける技術の裏付けをなし、更に科學的發明發見に資せんとするために機械的確實さを以つて進んで行けるような助力的手段を求めたのは少しも怪しむに足りない。これが歸納法であり、此の展開が「ノーヴム・オルガヌム」なのである。而もベーコンの考えている科學の目的が人間生活と密接に結びつき、その力となり、それに成果を齎らすことによつて人間の力の限界を擴張するにあつた。從つてそれ迄の科學、哲學が高遠な理想を對象とする徒らな觀念的學問であつたのに對し、現實的であり、實用的であるものとして此等を考えたのであり、斯かる性格規定の缺如が此等を無意味なものたらしめて來たと斷じている。そこで此れ迄の學問が眞理を開示するよりも寧ろ誤謬を固定化するに役立つたとすれば、これを救う方法は如何にあるべきかという問題にあつて、彼は「われわれの單に殘されている希望と救いは、悟性の全體の活動について再び始めからやることである」（註12）と說いているのである。これは悟性をそれ迄の學問の如く絕對的に固定化するのではなく、「最初の現實的な感覺自身の知覺から悟性のために一つの新らしい確實な道を開拓すること」（註13）によつて悟性の全活動を正しく導くことを意味している。此の點こそロックの Essay on hum an understanding「人間悟性論」に於てその根本原則として發展的に繼承されるものである。ともあれ、ベーコンは歸納法を以つて感覺的知覺に助力と指導を與え、悟性をして正しい進路に向わせんとしたのである。

然るに彼の斯かる方法が貫かれる爲には、その前途に横たわる障害を取り除く必要を感じたのである。即ちそれがベーコンの名と共に切り離すことが出來ぬ Idola「偶像論」となつて現われるのである。それは科學的知識の進歩を阻害する先入的虛僞の概念に對する分析論である。「四種の偶像が人間の精神を圍んでいる。それ等に對して區別をする爲に名稱を附し、呼んで第一を Idora Tiibus 種族の偶像、第二を Idola Specus 洞窟の偶像、第三を Idola Fori 市場の偶像、第四を Idola Theatri 劇場の偶像と云う」（註14）と述べてある。略述すれば種族の偶像とは人間性即ち人間の心性から陷入る謬見であり、人間の悟性は凹凸ある鏡にも似て、光を不規則に受入れ、事物の性質に自己の性質を混同することによつて事物を變折したり畸型化したりするというのである。第二の洞窟の偶像とは井蛙の謬見とも言うべきもので、個々人がその特異性、教育、交際、讀書等の環境に依存することによつて自然の光を誤ることである。第三は市場の偶像で此は人間相互の交際と結合によつて形成されるものであり、特に誤まてる言語の選擇から（理解の程度の差異から生ずる）發生する誤謬であり、學者といえども此の例に洩れず人々をして空虛な論議を醸し出し、無意味な空想に走らしめるものであるという。最後の劇場の偶像は、哲學の特殊な構造を持つドグマや、論證の誤まる法則が人間の精神に這入することによつて生ずる誤謬である。此れは從來受け入れられ想像された全部の哲學體系が、創造した虛僞的な舞臺的な世界に持ちこまれて上演された脚本として考えられるからだと述べている。（註15）斯くしてベーコンは具體的例證を示しつつ比較的詳細に偶像論を展開しているが、「偶像論は近時知識社會學者マンハイムによつてイデオロギー論の先驅をなしたものとして注目されている」（註16）所以も、放置された人間悟性が如何にして虛僞の觀念を傳播するかをその示唆に富む例證によつて知ることができるであろう。偶像を棄てて自然の書 The book of

nature に學べという彼の主張こそ一切の外からの權威、權力によつて齎される謬見を毅然として排する近代自覺史の先驅たるに相應しい。偶像論に續いてアリストテレス的論證樣式に駁論を與え、次に諸學說卽ち公認された哲學及び學理の體系に對する論評を試みている。斯くして科學を妨げる誤謬と從來の學說に斧鉞を加えた後、更に第二卷本論で展開される思想の如何に有望であり、彼が揭揚するところの目標の如何に高貴であるかを述べて「ノーヴム・オルガヌム」の「自然の解釋及び人間帝國について」第一卷を終つている。（註17）（註18）（註19）

此れ迄第一卷について考察を進めて來たが、ベーコンにとつては第一卷は第二卷のためのプロローグであり、本論への道拓きであつた。然し思想史的意義より見れば前者は遙かに後者に優れ、特に「イドーラ」は最も精彩を放つている部分である。然し當時の思潮に風雲を呼び起したのは第二卷であつたことは頷かれるところであるが、現今では一箇の古典としての存在意義を有するのみであろう。尤も第二卷に於ける「形相論」は物質の本有的屬性を解明し、定義づけて此を運動と見做してそれが形相の顯現であるとし、その運動に物理的法則、因果的關連を認めることから歸納法の具體的適用を說いている點、しかもそれがデカルトの數學的演繹法に並ぶ物理的歸納法として、近世科學方法論上の偉大なる所產である點、此れが十八世紀フランス唯物論への直接的志向を示したという點等々、輕視すべからざることは言う迄もないが、別の機會に讓りたい。

では以上の如きベーコンの思想の時代的背景はいかなるものであつたか。若しベーコンが神意が世界を支配し、服從が最高の道德であつたあのうつとうしい中世紀に生れたならば、彼の類稀な頭腦でさえも實驗を基礎とする歸納法に著想し得たか否かは確かに疑問である。彼の天才を生んだ十七世紀が發明と發見の黎明期であり、從つて人間の力の自覺が始まつた時代であつたことは人類にとつて實に幸運であつたと言わなくてはならない。若しこの時代にアメリカと印度への航路が發見されることなく、誤謬と冒險によつてではあるが地球の全表面が征服されなかつたならば、若し羅針盤と火藥と印刷術が發明されなかつたならば、また望遠鏡によつて天體の秘密が曝露されることなく顯微鏡によつて微少の存在が顯示されることがなかつたならば、更にローマ法王の權力の衰頽や宗教改革運動や國家の興隆がなかつたならば、「知識は力である」（註20）という信念も、發明と發見によつて人々の生活は完全に改造されるという希望も果して抱き得たかは解らない。かくして人間が自己の力を改めて自覺し、自己の知識を力と考え、科學的發明、發見に社會の進步を豫想し、その爲の學問的方法論が人間の經驗と實驗から導かれる歸納法であつたということは、後繼者にホッブス、ロックを迎えてイギリス經驗論を形成し、科學的眞理が人間の効用と一致すべきであるという現實的要請がベンザム、ミルを呼んでイギリス功利主義を形造り、經驗論が持つ一面的屬性としての唯物論的要素が十八世紀フランス唯物論に開花し、先見的謬見を偶像論で打破することによつて近代イデオロギー論の礎石を置くということを約束したのである。この事が近世の哲學、科學の總べての源泉をベーコンの名に結びつける所以である。然し乍ら啓蒙期の學者がなべてそうであつたように、ベーコンにあつても知識に於ける優劣の跛行的性格を內藏していた。あの優れた方法論、科學的造詣にも拘らず、地球不動說を考え、（當時は既にケプラーが出た）月が氣體であり、空氣の熱傳導が金屬のそれより速いと言うのである。然しかかる誤謬があろうとも、此の書の價値は少しも傷かぬであろう。何故ならこれを書かれたものとして固定化して考える場合には、幾多の不備や缺陷が發見されるであろうし、この書よりはJ・S・ミルの「論理學體系」を歸納法的論理の優劣の面から選ぶとすれば確かにそうであろう。だが歷史的諸條件の上に立つての制約を克服し、如何なる進步性を示しているかによつてそのものの評價が下されるとすれば、この書の持つ意義は高くこそあれ低く評價さるべきではないと考えられるからである。中に貫く眞摯にして熱

烈な科學精神を讃えてこの書を「不朽の靈書」（註21）と呼んでいるのは蓋し名言であろう。

（註1）一六二〇年出版。ラテン語を以つて書かれている爲 The World's Great Classics の英譯に依る。以下の註は斯書の頁に從う。他に Joseph Devey. R, Ellis の英譯がある。

（註2）ibid, p. 315.

（註3）ibid, p. 315. Interpreter of Nature という語は最も重要な意味を持たされている。

（註4）ibid, Preface p. vii

（註5）ibid, p. 469.

（註6）ibid, p. 315.

（註7）ibid, p. 316.

（註8）ibid, p. 316.

（註9）ibid, pp. 316～7 世に此をガレリオの科學方法論の繼承と見る。

（註10）戸坂潤「科學論」三笠書房、三四頁。

（註11）「ノーヴム・オルガヌム」（世界大思想全集七卷）岡島龜次郎氏譯序、一〇—一一頁及び ibid, Bacon's Preface, p. 311 ff 參照。

（註12）ibid, Bacon's Preface, p. 312.

（註13）ibid, Bacon's Preface, p. 311.

（註14）ibid, p. 319. J, Spedding; Lord Bacon's Works, p. 163.

（註15）ibid, p. 319. ff.

（註16）平井新教授「社會主義と共產主義」三〇七頁。

（註17）一番厄介な敵手として迷信と宗教的熱狂（ibid, p. 345）を擧げている點は教會の權力と壓力に對する反對として deism の一面を表わしている。

（註18）ibid, p. 357. p. 332. ff.

（註19）岡島氏、前掲書二三頁。

（註20）同書、八—九頁。

（註21）同書、二五頁、ibid, p. 354. ff.

三

前節で述べたベーコンの體系が、實行さるべき施設と原理とによつて自由と正義の王國を展開したものが New Atlantis である。

社會主義思想の淵源を辿れば、最も萠芽的な形であらわれたのがプラトンの「理想國（ポリティア）」であろう。それ以來マルキシズムの出現に至る迄の一連の系譜を眺める時、そこに二種の糎を見出す。一方は現實の社會惡を憎んで自ら畫く理想社會に逃避せんとする態度のものであり、そこでは精々世間の良識に問い、權力者の道德心に訴え、大方の贊同を得てこれを實現しようとしたに止まる。最も消極的には社會に對する警句を發するに終つているものすらある。他方は社會的矛盾を衝くことによつて社會惡を根絶せしめようとするところのものであり、訓練された精鋭分子の實力行使による權力奪取を計り、一擧に理想社會を樹立せんとするものであつた。後者は前者に對して餘程後れてその發生を見る。然し後者は一應社會制度的な意識から發した社會主義革命を目指したに反し、前者には嚴密に社會主義のカテゴリーに入るかどうかを怪しまれるものすらあり、社會主義的要素の濃淡も樣々である。寧ろ考えられた理想繪圖が後世になつて社會主義的なグラスフィケーションの中に位置づけられる要素とニュアンスを認められるという程度のものもある。「ニュー・アトランチス」は丁度これに該當するといつて差支えなかろう。一般的にはこの書は社會主

義史の中には加えられていなし、嚴密には社會主義が私有財産制度の否定、生産手段の社會的所有を意味するものであつてみれば、此の書は確かにその意味から外れているのであるが、社會主義思想は Utopia 的理想鄕への思慕から發したものであり、理想鄕がたといその内容に社會主義の嚴格な要素を含んでいないとしても、それの持つ社會主義への發生に於ける刺戟と影響とを見れば、强ちこの書を同列に置いても不自然ではなかろうと思われる。

扨て、このニュー・アトランチスはプラトンの「アトランチス」に示唆を受けて書かれたことは衆知の事柄である。プラトンの「アトランチス島物語」というのは、彼の理想國家論中「理想國（ポリティア）」篇、「テマイオス」篇に續く「クリチアス」篇の別名である。モアの「ユートピア」、カンバネルラの「大陽國」、H・G・ウエルズの「新ユートピア」等總べてこの書の直接的影響の下に生れたものである。此處ではギリシャの七賢人の一人であるソローンがエヂプトから持ち歸つた古代アテネの傳說をクリチアスが物語つている。「此の國には、種々の階級の國民が住み、工匠、農夫及び神聖なる階級として武士が存在した。武士は一團となつて住居し、養育及び教育に關しては、事缺かざる程度のものを供給されると雖も、而も一物も私有財産と稱すべきものがなく、凡て之を共通に所有し、又他階級の者より、自己の必要とする食物以外一物も得ることを求めず、前に我等が理想國の護國者として述べた所の凡ての任務を遂行した」（註1）と述べてある。續いてアトランチスの建國を語り、最後に壯大なる國家的企劃を示してクリチアス篇は中斷されている。第二のアトランチス建國は全く神話傳說的のものであり、最後の國家的企劃も現實を遙かに離れた夢想的なものである。ここではその内容に觸れる暇もないが、唯ベーコンの「ニュー・アトランチス」が其の中で多少の違いを加えて、殆んどその儘アトランチス島を描寫している點は、此の書の表題が附せられた理由として興味があることだけを記するに止めたい。

所でこの「ニュー・アトランチス島」というのは、五十一人の船客を擁する船が漂流して辿り着いた島を指す。幸い上陸を許されて島の驚くべき理想鄕生活を見聞し、如何にしてかくあり得たかを質すのであるか、その答の一つがこの書の持つ最も重要な箇所である。それは島の豐かである理由をソラモーナという嘗て君臨していた王の行跡に歸すのであり、王の特に秀でた事業の一つとして Salomon's House と呼ぶ教團か學會に當るものの設立を擧げているのである。（註2）此の別名が、The College of Six Days' Works（註3）と呼ばれ、そこでは森羅萬象の眞の性質を探求することを目的としていることを教えられる。かくしてサロモン學院の長老に謁見する機會が與えられ、親しく長老から第一に學院創設の目的第二に仕事のために有している裝置と器具について、第三に研究生の定められた仕事と機能について、第四には執行する儀式と典禮について、（註4）話される。第一についてはその目的が「事物の原因と隱れたる運動とに關する知識であり、人間帝國の限界を擴大して、可能な總ゆるものを成就する」（註5）ことであるという。（註6）これこそ前節で述べた「ノーヴム・オルガヌム」の科學的目的に一致するものであり、その副題が示す如き人間帝國 regnum hominis の建設への道である。長老の語る第二以下は全て第一の目的達成の具體化に外ならないのである。第二の裝置と機具については、一々擧列することを控えるが、奇想天外と思われる程の一大科學研究所であり、自然科學的實驗の爲に凡ての設備が調えられている。（註7）そこでは具えられた裝置と器具を驅つて大膽な應用科學の適用を計り、無限に生産力を擴張發展せしめ、人間生活の用に供せしめているのである。ここに留意すべきは、設備と實驗、及びその成果が自然科學自身の目的の爲ではなく、人間生活に直結しているという點であり、それ故にたといその内容が荒唐に流れ、夢想に走つていたとしても、科學の進歩と科學精神が必ずや人間生活を統御し得るという深い確信に裏付けられていたという點である。第三の研究生が從事する仕事と機能であるが、奇妙な職名を有する幾つかの部門があり、（註8）蒐集、

實驗、反省、綜合、抽象、再檢討、決定に至る一連のプロセスを、機械の如き精密さを以つて職務が分擔され、各々の機能を充分に發揮する組織となつている。而もそれは「ノーヴム・オルガヌヌ」に於ける歸納的方法の完全なる實現態なのである。最高の段階にあつて「以上の實驗による發見を、より大なる所見や公理や定理に迄引上げる爲の三人形が居る。此等を呼んで Interpreters of Nature（自然の解釋者）という」とあるが、（註9）「ノーヴム・オルガヌム」に「自然に適用する人間理性を、區別のために呼んで自然の豫想（アンティシペイション）と云い（此れは輕率で早まつたものであるがために）、又事物から正當に抽出されるものを自然の解釋（インタープリテーション）という」（註10）として、正しい方法の適用が自然の解釋にあることを强調している點を照合すれば、兩者に跨る深い關連を親うことができるであろう。第四の儀式と典禮についてであるが、二つのギャラリーがあつて、一方に發明の原型と模型がおかれ、他には主な發明家の像が置かれている。（註11）その發明は凡ての分野に亙り、價値ある發明の度に發明家の像が建てられることになつている。又彼等の宗教的な日々の仕事は神の驚嘆すべき事業を讃美し、その助力を祈願することに盡きている。そして最後に、主要都市を廻り、有益な發明を發表し、天災地變、氣象觀測による自然現象の豫想、及びその豫防と救濟を人々に勸告するのである。以上がサロモンの長老の言であり、此處で此の哲學小說「ニュー・アトランチス」は未完の儘殘されている。此れ迄「ニュー・アトランチス」の概略を述べたのであるが、そこに盛られている總ての創意と思想が、徹底せる科學萬能精神に貫かれていることは明白であろう。從つてこの島に住む人々の敬虔で美わしい道德すらも科學的訓練と自覺に基く自已尊重の結果なのである。要するに「ニュー・アトランチス」は、生產の科學的組織のモデルであり、發見者・發明者・技術家・科學者等を尊敬することに立脚せる一共同體である」と言えよう。（註11）

「ニュー・アトランチス」はプラトンの「ポリティアの」影響を受けたと同じく I. More; Utopia に負う所が多い。それ所か全くの模倣とすら思われる敍述の箇所も少くないのである。例えば、「ニュー・アトランチス」の國情を問う時に受ける答辯は、「ユートピア」に畫かれているポリレロス人の國と殆んど違わないのである。然し兩者には決定的な相異が横わつている。そして此の比較照合こそ、「ニュー・アトランチス」の特質を明かになし、その社會思想史的位置を正鵠に與えるであろう。「ユートピア」は單に空想の所產だけに止まらず、優れて鋭い社會批判の上に立脚した理想鄉であつた。即ち第一編を脈々と貫く社會批判は Enclosure Movement の齎らした土地の私有化、農業經營の營利化、農業と牧場の企業化、それによつて生ずる無產農民、乞食、浮浪、者强盜等の增加、此に加える國家の流血に及ぶ冷酷な彈壓政策等々の社會矛盾を、深い洞察によつて見事に剔抉しているのである。確かに「英國社會の營利主義的傾向によつて將に亡びんとしつつある共同團體的生活の悲哀を反映」するものであるとはいえ、（註13）其の矛盾の根源を私有財產制度に見出した所に、彼の卓越せる社會科學的定見が親え、その故に榮譽ある價値が附せられる所以である。又其處に生產手段の共有という概念が出て來るのであるが（消費手段の共有を考えていた前代の共產主義と截然と別れる點であるが）、それによつて礎かれる共產制社會に對し起り得る批判に備えてユートピア社會を描いているのである。注目すべきは、それは鋭い社會批判の序曲によつて始めてユートピアが構成されているということであり、若し當代の社會惡を洞察することなしにユートピアだけを記したとすれば、この書の持つ價値は半減したであろうということである。換言すれば、社會的矛盾の洞察と批判に裏付けられて「將に興起し來らんとする近代國家に共產主義を適應せしめた、即ち近代の國民的國家の範圍内における共產的組織という思想を展開」（註14）せしめた所にユートピアなる理想鄉が生れたのであり、その意味に於て科學性があるのである。然るに「ニュー・アトランチス」の場合は社會的政治的感覺は少しも見られないのであり、いわんや社會的矛盾を探求するということ等は及びもつかなかつた。その故

は當時「近代的國家が國民的經濟政策を遂行し、凡ゆる國家的政治的權力を傾注して全國民の現在及び將來に於ける經濟的利益を擴張せんとする」(註15)時に當つており、英國の國力が目覺しい伸張を見せていたことが第一であり、自然科學の相繼ぐ所産が人を瞠目せしめ、遂にはここに自然科學時代を招來し、社會的な一切の不安や害惡は、自然科學的發明發見によつて發展せしめられた生産力によつて解消され得るという確信が一般的になつたこと、これが第二である。十七世紀初頭は誠に自然科學時代に相應しく、自然科學に貫かれるユートピア的性質を有する著述が公けにされた。卽ち、Joseph Hall; Mundus et Alter Idem, 1607. Eryciusputeanus; Comus, 1608. Johann Valen ti Andre; Christianopolis, 1620. Sir John Eliot; Monarchy of Man, 1622. 等がそれに當ると言われている。(註16) 此の樣な時に當つてベーコンが「ニュー・アトランチス」を著したことは當然であり、その目的が彼の科學的生産組織に對する押え難き慾求によつて打出されたことも尤もであろう。從つてモアが人類の幸福を社會改革と宗教的倫理に求めて「ユートピア」を描いたに反し、ベーコンは應用科學と生産技術の發展によつてそれを得んとして「ニュー・アトランチス」を書いたと言うことができよう。故にベーコンにあつては社會制度そのものは少しも問題にはならず、專ら科學的組織形態が希望の對象であり、それの完全なる創立設置によつて人類幸福の招來の可能性を見出しているのである。この兩者の違は「ユートピア」では平等の概念が強く前面に出され、生活樣式自體は派手なものではなく安泰なることを誇りとしているのに對し「ニュー・アトランチス」にあつては、物質的繁榮が强調され、衣裝、裝飾品の絢爛さを誇つている點が眼を惹く、――尤もサロモン學院の恩惠は人民等しく受けているのではあるが。こういうことから、ベーコンの中世紀的な貴族主義と、反對に Essays に見られる樣な社會制度と政治的機構に對する無定見から發する世俗主義が感ぜられる。從つてプラトンに始まり、モア、カンペネルラに續くユートピア思想が凡て私有財産の否定を核心として展開されているのに反し、ベーコンはこの事に一言も觸れず、精々この島の役人が、出したチップを受け取らぬということを美德として考えるに止まつた。勿論彼とてエリザベス王朝の亂世に生を享けた以上、社會的關心を持たず、社會的機構の內部矛盾を知らぬ筈はないが、彼の傳記を讀む者が等しく感ずる徹底せる卑劣な Machiavelism の示す如き俗惡的態度が、彼の理想鄕にそれ等を盛込ませなかつたものであろう。しかもこのことは「ニュー・アトランチス」を讀む者にユートピアの純粹性を感じさせずに、俗世間的臭を與える所以なのである。人によつてはこの書をユートピア文學の中に入れることさえ躊躇しているのである。ともあれ、確かにベーコンは自然科學及び哲學の研究にあつては、近世のエポックを劃する顯著な實績を擧げ、その面では優れて進步性を示していたというものの、中世紀的殘滓を背にし、貴族的權威に滿足し、權謀術數に奔る世俗的レアリストであつた。これが「ニュー・アトランチス」に於て新らしい社會制度の建設に筆の赴かなかつた理由であり、宗教に對しても消極的な理神論に終始し、神の權威を人智の浸すべからざるものとして明確な限界を劃した所以であろう。しかし十七世紀の驚嘆すべき發明發見に鼓舞されて、人智が自然科學を發展させることによつて社會を理想的なものにし得るという考えは、人間帝國の名が示す如く何と言つてもルネッサンスの洗禮を受けた近世の産物であることは爭われない。「サロモン學院の敍述はその中で彼が生活していた幻想の敍述である。卽ちわれわれが服從させられている自然的條件から解放されるだろうような理想的世界についてのものではなく、それに從つてわれわれが義務を果せば造られるようなわれわれ自身の世界についてのものである。つまり他日われわれ同樣のものによつて、實際に地上に現われると彼が信じていた事物の狀態についてのものであり、そして彼自身の仕事が明らかに促がしつつあるところのものの到來についての敍述である」(註17)と言う。確かにベーコンの願つた自然科學の進步はその後顯著なものがあるが、サロモン物語は最早一箇のお伽

話に化してしまつた。その理由は言う迄もなく社會的政治的無感覺に在る。(註18) 然し「ニュー・アトランチス」は彼の死後 Royal Society 英國學士會の設立を促したこと、及びフランスの Encyclopedie 百科全書の編纂を刺戟したことを以つて功績としなければならない。特に後者はベーコン崇拜者であるデイドロによつて偉大なる社會力となつたことは注目さるべきであろう。ともあれ「ベーコンの社會問題の解決を自然科學の發達及び應用に期待せる思想は、十七世紀をその背景において考える時、まことに一異彩たるを失わぬ。だがモアの「ユートピア」が文藝復興のヒューマニズムの發現であることを思い、そして文藝復興期の精神的一潮流が近代科學の基礎を置いたことを思えば、「ニュー・アトランチス」の出現もまた決して偶然ではない」(註19) と言えるであろう。

ベーコンは十七世紀の時代背景を、社會的には無關心を裝い、勃興する資本主義から故意に眼を外らし、中世貴族社會を暗に思慕することによつて、一面的に自然科學の道を歩んだが、成程そこに優れた歸納法を生み、豐富な科學知識を展開し、イデオロギー論の基礎を形成したものの、然も尙そのことが自然科學に基く理想社會「ニュー・アトランチス」の限界を齎す結果となつた。それにも拘わらず彼の學問的所産は高く評さるべきであり、「知識は力なり」という言葉と共にルネッサンスの人間精神を正當に見つめるべきであろう。唯自然科學に於けるとは反對に、彼の時代洞察の不明さと封建制度への妥協は、鋭い社會批判のモアに對して遙かに讓歩しなければならぬし、社會思想史的評價に於ても數段下位に置かれることを甘んじなければならぬであろう。

（註1）プラトン「理想國」津久井龍雄譯、二〇〇頁。
（註2）The World's Classics: The New Atlantis, p. 255. 以下斯書の頁に從う。
（註3）神が自然を六日で創造したということから、此の名稱が出た。
（註4）ibid, p.265.
（註5）ibid, p. 265.
（註6）ノーヴム・オルガヌムは副題として、De Interpretatione Nature et Regno Hominis なる言葉が附せられている。
（註7）ibid, p. 265. ff. instrument の必要性は認識と當つて、經驗を悟性のそれであると言つていることからも理解されるであろう。
（註8）ibid, pp. 273～4.
（註9）ibid, p. 274.
（註10）Novum Organum, p. 317.
（註11）ibid, p. 275. 彼の此の願望は、後に Royal Society の出現によつて現實化される。
（註12）波多野鼎氏「社會思想史概說」春秋社、五四頁。
（註13）高橋誠一郎教授「ユートピア島より新アトランチス島への移動」三田學會雜誌第十九卷三號、一五頁。
（註14）波多野鼎氏、前掲書、四九頁。
（註15）高橋誠一郎教授、前掲書、二四頁。
（註16）同書、二五頁。
（註17）J. Spedding; Lord Bacon's Works, Vol. 3. p. 122.
（註18）カール・フォルレンダー「哲學史入門」（廣島定吉譯）は「ニュー・アトランチスを評して「人々が求めて止まぬもの、生活を出來るだけ快適にするものは、一つとして缺けていない。ただ言及されていないのは、社會的新秩序だけである」二〇七頁と言い、社會的感覺の缺如を指摘している。
（註19）波多野鼎氏、前掲書、五四頁。